

門本 泉 [著]

臨床犯罪心理学

——加害者理解の「枠」と介入の「技」

四六判上製・金剛出版

2025年7月刊

定価3,960円（税込）

評者＝小島秀吾（国際医療福祉大学）



犯罪を冷静に語ることは難しい。

犯罪は社会の安全を脅かし、被害者や遺族の人生を傷つける。人は犯罪者に対して恐怖や憎しみを覚える。傷つけられた被害者の痛みや苦しみを思えば、犯罪者を声高に糾弾したくなる。しかし、犯罪者に接して生身の彼らを知ると、犯罪を為すに至った彼らなりの事情があることもわかってくる。そもそも対象者に共感的・受容的に寄り添うように訓練されている心理臨床家としては、犯罪者だからといって相手を断罪するような態度は取りづらい。かくして犯罪に関わる専門家は、えてして犯罪者に対して非難か擁護かの両極端に陥りがちである。しかも、犯罪というものは人の感情を揺さぶりやすいだけに、犯罪者を糾弾する声も擁護する声も、気負いや正義感が混じって熱くなる。力こぶが入る。犯罪者に強い非難を向ける人ほど、いったん彼らの不遇な事情を知るやその擁護者に一転することも稀ではない……

前著『加害者臨床を学ぶ』（金剛出版 [2019]）同様、本書にも一貫するのは、犯罪者を語る際の著者の絶妙なバランス感覚と力みのない自然体である。

たとえば、『『期待』考』と題されたコラム。受刑者や非行少年が「再出発」に際して宣言や約束をする姿は、著者の目に「美しく映る」という。彼らの決意に感動する著者の言葉もまた美しい。けどなあ、とも思う、更生はそんなに容易くはないんじゃないの？ 頁をめくると、やはりと言うべきか、立派な決意を口にした受刑者が反則行為をして残念な結果に至った例が描かれる。矯正の現場に長く勤めた著者は、受刑者の更生が容易ではない現実をよく知っている。きれいごとではない。それでも彼らが決意する姿を目にすればそれを美しいと感じ、感動するのだ。冷厳な現実を知りつつ、受刑者のその時々言葉の真実味を感じ取る。その上で「受刑者の本気の宣言や約束を、われわれは受容するでも期待するでもなく『預かる』という心持ち

で反応するのがよい」と著者は言う。知がまさることなく、情に流されることもない、この絶妙な力加減。

専門家は知識をもつほど、犯罪者や非行少年に虚心地坦懐に向かいづらくなる。著者は、専門家が「発達障害」の診断にとらわれやすく、いったん発達障害の診断に目を奪われるとそれ以外の要因を見失いがちになること（本書，pp.93-94）や、性犯罪者や性非行少年に性被害体験があると彼らの加害行為をその被害体験からのみで捉えがちになること（本書，pp.143-144）を指摘する。発達障害やトラウマが非行・犯罪に与える影響の重要性は踏まえつつ、そのような臨床心理学のトレンド概念で犯罪や犯罪者をわかったような気になることに著者はちくりと異議を申し立てる。専門家ずれしない健康な良識が小気味よい。

それなりに挑戦的なことも情緒的なことも書かれているはずなのに、押しつけがましきや暑苦しさとは一切無縁なのは、達意の文章のおかげである。犯罪者を語りながら、その語り口は軽やかですらある。

と書いたが、この本の魅力はこれだけでは語り尽くせない。実際にご一読されることをお勧めする。未読の方は前著『加害者臨床を学ぶ』も併せて。ぜひ。